

処刑
された
死に
戻りの
隣国の
第六王子は故国を捨て、
ギロチン皇女と
復讐を誓う

2

Sammbon

サンボン

illust. 俄

shokei saretā shinimodori no

dai 6 oji ha kokoku wo sute ringoku no guillotine kojo to

fukushu wo chikau



◆アビゲイル◆

ストラスクライド皇国の
第一皇女であり、処刑人。
その冷酷さから
『ギロチン皇女』と
恐れられているが……

◆エドワード◆

皇国の王。統治力と
武力の高さに由来した
『金獅子王』^{きんじしやう}という
二つ名を持つ。

◆グレン◆

『皇国の矛』と
呼ばれるほど強い、
槍使い。『王選』を経て
アビゲイル陣営に加わる。

◆ギュースターヴ◆

ヴァルロワ王国の第六王子。
故国に騙されて
殺された後に死に戻り、
復讐に生きることを決意した。

◆サイラス◆

『皇国の盾』^たと呼ばれる、武人。
豪快で義理堅い。
アビゲイルに与っている。

◆デーウィッド◆

皇国に滅ぼされた国の
最後の王族。エドワードの
側近として潜伏し、
復讐する機会を窺っている。

◆セシル◆

治癒能力を操る聖女。
女神リアンソンに
揺るがぬ信仰を捧げている。

CHARACTERS

序章

王のみが入ることを許された、豪華な一室。

ここにはストラスクライド皇国の歴代の王にまつわる品々や、肖像画が飾られている。

金銀財宝、王冠、王達が身に着けていたもの。

そう……皇国の歴史と、歴代の王の栄誉の全てがここにあった。

この中で佇む現皇王——『金獅子王』ことエドワードⅡオブⅡストラスクライド。

彼はこれまでの王が誰一人として成し得ることができなかった偉業——百年という長きにわたるヴァルロワ王国との戦いに終止符を打つという大事を成そうとしていた。

それを達したことを以て、彼は偉大なる王として永遠に語り継がれる——そのはずであった。だが。

「ぬううう……っ！ 彼奴のせいで、全てが台無しになってしまったわ……！」

英霊達の肖像画を前に拳を握りしめ、エドワード王は齒ぎしりする。

一年前に行われた『王選』において、自身の傀儡として祭り上げるはずだった第二皇女ブリジッ

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、
隣国のギロチン皇女と復讐を誓う 2

トは敗北し、皇国の負の象徴としての負担を押し付けるはずの第一皇女——『ギロチン皇女』アビゲイルがよりによって勝利し、次の女王となることが決まってしまった。

ブリジットに後継として皇国を守護させる。

その上でエドワード王自身は『皇国の盾』サイラスⅡガーランドと『皇国の矛』グレンⅡコルベツトを従え、大軍をもってヴァルロワ王国に攻め入る予定だった。本来であれば。

そのような思惑は、全て瓦解した。今やブリジットは、『王選』後にアビゲイルを殺そうとした罰として、テミズ川の畔に幽閉されてしまっている。

『王選』は皇国の重鎮によって行われる投票によって勝敗が決まる。

皇国内でサイラスを除けば支持者がほとんどいない『ギロチン皇女』がそれに勝利することなど、万に一つもあるはずがなかった。

しかし、一人の男がそれを実現してしまったのだ。

その男の名はギュスターヴⅡデュⅡヴァルロワ。

ヴァルロワ王国の第六王子であり、今は『ギロチン皇女』アビゲイルの婚約者である。

「忌々しいが、あの小僧の言うとおり余には時間がない。となれば、アビゲイルに後事を託すしかないが……」

ギュスターヴの顔を思い浮かべながら右の拳を開いては握りしめ、エドワード王は顔をしかめる。

最初に身体に違和感を覚えたのは四年前。

戦場で剣を落としてしまった時だ。

当時は連戦による疲れが出たものだと考えていたが、日に日に症状は悪化し、屈強な身体は蝕まれていった。

エドワード王は病によって力が減退していつている——彼自身はそう思っている。

だが、実際は違う。

彼の体を蝕んでいるのは、彼の侍従長、つまり懐刀であるデーヴィッドⅡハミルトン……もとい、皇国に滅ぼされたグリフィズ王国の最後の王族、ダビドⅡアプⅡグリフィズが彼に少しずつ与え続けた毒である。

その事実を知っていたのは、張本人のデーヴィッドと、ギュスターヴだけ。

ギュスターヴは処刑された後に過去へと死に戻っているため、エドワード王の病の秘密を知っていた。そして、彼はその情報を活かしてエドワード王に取引を持ち掛け、『王選』を行わせた上で、裏ではデーヴィッドを懐柔し、アビゲイルを勝利に導いたのである。

その事実にも気づかず、エドワード王はただ危機感と焦燥に駆られていた。

彼にとって重要なのは、自らが史上並ぶ者のない英雄へと……いや、神に等しい存在へと登りつめること。ヴァルロワ王国に勝利し百年の戦争を終わらせることでその頂へと登りつめるはずが、

このままでは道半ばにしてこの世界の舞台から消えてしまうこととなる。

それだけは、絶対に受け入れられない。

「だがどうする……？ おそらく余の身体は、もつてあと数年といったところだろう」

王国との戦を優位に進めていたにもかかわらず、あえて休戦協定を結んだ理由として、もちろん自身の体調の問題はある。

だがそれ以上にヴァルロワ王国に決定的な楔を打ち込もうという意図があった。

つまり、劣勢だった王国が立て直しを図ろうとする隙を突き、短期決戦に持ち込むための罠を仕掛けようと考えていたのである。

ブリジットを予定どおり後継にできていれば、背後を気にすることなくヴァルロワ王国へと攻め入ることができたが、アビゲイルが後釜となってしまうた今、何一つ油断はできない。

何せ。

「……彼奴はあ、女の娘なのだからな」

今から二十五年前、当時皇太子だったエドワード王はヴァルロワ王国との決戦に備え、後顧の憂いを断つために皇国の西側にあった小国群を制圧した。

小国群は、時には皇国に味方し、またある時は皇国を裏切つてヴァルロワ王国に与するなど、時勢に応じて手のひらを返す風見鶏のような者達。

エドワード王からすれば王国打倒のために邪魔な存在にすぎず、制圧に乗り出すのは当然であつた。

大国ストラスクライド皇国の前に、数ある小国は次々と打ち滅ばされ、全ての王族はエドワード王の手によって処刑された。

そんな中、グリフィズ王国とグイネッド王国の両国は必死に抵抗し、『金獅子王』エドワードを大いに苦しめる。

そこでエドワード王は、他の小国とは異なり両国に対して懐柔策を取ることにした。従属すれば、王族を含め国民の生命と財産を保障すると。

グリフィズ王国は皇国の提案を突っぱね、徹底抗戦を決めるが、グイネッド王国は提案に応じた。それに伴い、グイネッド王国は従属の証としてたった一人の後継者であった王女のレオノーラ＝オー＝グイネッドを、エドワード王の妻として差し出す。

そう……レオノーラ王女こそ、『ギロチン皇女』アビゲイルの実母である。

「……あ、あの女を含め、グイネッドの連中は亡き者にしてやったが、アビゲイルがいつ余の寝首を掻いてくるか分からん」

たかが小国と侮っていたことは間違いないが、グイネッド王国に戦で苦しめられた屈辱を、エドワード王は今も忘れてはいない。

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、隣国のギロチン皇女と復讐を誓う 2

何より、グイネッド王国で指揮を執っていたのは、他ならぬレオノーラ。十分の一に満たない兵力で皇国と互角以上の戦いを演じられたのは、彼女の采配によるもの。

だからこそ、エドワード王は受け入れられない。

史上唯一の英雄となる男が、小国の王女よりも才能で劣ると認めることなど。

とはいえ、『王選』を行いアビゲイルが次期女王となることが決定してしまった以上、たとえ王であってもこれを覆すことはできない。仮にそんなことをすれば、エドワード王は皇国内において求心力を失い、ヴァルロワ王国との戦どころではなくなってしまう。

そう、彼は今グリフィズ王国とグイネッド王国の亡霊に追い詰められていると言つて過言ではない。

病——デーヴィッドの毒——による苦しみに耐えながら、エドワード王が腕組みをして思案している。

「皇王陛下、こちらにいらつしやいますでしょうか……？」

扉をノックする音とともに、侍従の男の尋ねる声が部屋の外から聞こえてきた。

「……うむ。余はここだ」

平静を装いつつ扉を開け、エドワードは侍従の前に姿を現す。

「陛下に書状が届いております」

「余に？」

エドワード王は首を傾げつつ、侍従が恭しく差し出した書状に目を通すと。

「……なるほど。そうきたか」

エドワード王はそう呟き、口の端を持ち上げた。

第一章

「どうした。その程度か」

「く……っ」

息一つ乱すことなく、事もなげに振るわれたグレンの槍を間一髪で防ぎながら、僕は歯噛みする。『王選』を経てこちらの陣営に加わった『皇国の矛』グレンⅡコルベットとは、今では日々こうして訓練場で刃を交える間柄となっている。

グレン曰く、『最も傍にいますお前がアビゲイル殿下を守らねばならないのだから、誰よりも強く必要があるのは当然だ』とのこと。おかげで僕は、こうして徹底的にしごかれているというわけだ。

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、
隣国のギロチン皇女と復讐を誓う 2

それにしても、感慨深い。

かつて——一度目の生ではグレンは僕の敵だったのだから。

そう……僕は今、死に戻って得た二度目の人生を生きている。

ストラスクライド皇国の敵国であるヴァルロワ王国の第六王子だった僕は、王子とはいっても未子^しな上に国王と使用人の間に生まれた不遇な存在。国内では疎まれながら生きていた。

その挙句、休戦に際してストラスクライド皇国の第一皇女である『ギロチン皇女』アビゲイルの夫にさせられる、という仕打ちを受けたのだ。

実質人柱にされたも同然な処遇だが、それでも僕は腐らなかつた。

王国の間者^{かんじや}として優秀な成果を残せば国王である父をはじめ、兄弟、そして心の支えだった彼女——西方諸国の各地に多くの信者を持つ、聖リアノン教会の聖女、セシルⅡエルヴァシウスに認めてもらえると思っていたから。

僕とセシルは恋人同士であり、王国の地でいつまでも僕の帰りを待っていてくれる……と思っていた。

だが実際は、セシルも僕を利用していただけだった。

王国が勝利した暁には、僕を皇国から救い出す。セシルはそんな甘言^{かんげん}を囁^{ささや}いていた。

しかし待っていたのは、私利私欲のために皇国だけでなく王国も欺^{あざむ}いた大罪人^{たいざいにん}の烙印^{らくいん}を押され、アビゲイルとともに斬首刑に処されるという結末だった。

王国やセシルの指示に忠実に従い、王国軍を皇都ロンディニアに招き入れ、勝利の立役者となるはずだったのに。

そうして何故か死に戻った僕は、二回目の人生でアビゲイル達を利用して王国への復讐^{ふくしやう}を果たそうと決意し、努力を重ね策を講じてきた。

無能な第六王子として油断させておきつつ、アビゲイルに皇国を治めさせて、国力をつけて王国を打倒する——それが今僕が考えている計画の全容だ。

その中で『王選』での勝利は一つの成果だ。

それによって、今こうしてかつては敵対していた『皇国の矛』とも『皇国の盾』とも良好な関係を築けている……そう考えると、着実に復讐に向けて進めているのだと実感できる。

そんな余計なことを考えていたからだろうか、グレンの攻撃を防ぎ損ねて、首筋^{くびすじ}に槍を突きつけられてしまった。

「あっ」

「油断するな。……まあいい、今日はここまでにしておこう」

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、隣国のギロチン皇女と復讐を誓う2

そう言うところグレンは構えを解き、訓練用の槍を近くにいた騎士に預けた。

「はっは！ なかなかどうして、ギウスもグレンの槍相手に互角に渡り合ってみせるとはのう！」
僕はグレンの手合わせを眺めていた『皇国の盾』サイラスⅡが、膝を叩いて豪快に笑う。

僕は『王選』が行われる裏でグレンに勝利した。

しかしそれは、グレンが本来の得物である槍を使っていなかったのと、僕の奥の手を彼が知らなかったことが大きい。

実力においてはグレンの方が明確に上だった。

それがこの一年でここまで強くなれたのだから、いつも手合わせをしてくれたグレンと、厳しく指導してくれたサイラス将軍には頭が上がらない。

「サイラス将軍、あまりギウスを褒めないでくれ。そもそも、俺といい勝負をしている程度では話にならないのだから」

「グレンも無茶な要求をするわい。自分がなんと呼ばれておるか分かっておるのか」

「もちろんだ。それでも、ギウスはやるしかない」

無茶を言うな、と言いたいところだが、この言葉はグレンがアビゲイルに忠誠を誓ってくれていること、そしてこの僕に期待してくれていることの裏返し。

甘んじて受け入れるとしよう。……そういうことでいいんだよね？

ああ、そうそう。『王選』以降、グレン、サイラス将軍ともに、僕のことを『ギウス』と愛称で呼ぶようになった。

僕としては死に戻る前の人生を含め、愛称で呼ばれたことなど一度もないので少々むずがゆいが、それはそれで仲間として認めてもらえたということだと考えて、受け入れた。

「ギュスターヴ殿下、そろそろお時間です」

そんな言葉とともに現れたのは、侍女のマリエットⅡジル。ヴァルロワ王国とともに皇国までやってきた、今では僕の右腕と呼べる存在。

死に戻る前の人生では聖女セシルと繋がっており、王国の指示を受けて僕を翼に嵌めた一人だった。

しかし、セシルの正体を暴き彼女の弟の治療費を支援したことで、こうして絶対の忠誠を誓ってくれるようになった。

「……ギュスターヴ殿下？」

「ああいや、すまない。もうそんな時間だったな」

不思議そうに尋ねるマリエットに、僕は取り繕い返事をした。

そう。これから僕には、大事な面会があるのだ。

「では今日の訓練はこれまで、ですな」

「ああ、早く行くがいい。というか、絶対に待たせるな」

「分かっているよ」

サイラス將軍とグレンに尻を叩かれるように追い立てられ、僕は服を着替えて面会場所である皇宮の中庭へ。

そこには。

「ようこそお越しくできました」

まるで仮面でも被っているかのような無表情で優雅にカーテシーをする、小さく華奢な美しい女性。

身に纏っているのは、瞳の色と同じ真紅のドレスだ。

彼女こそがアビゲイルⅡオブⅡストラスクライド。この国の第一皇女であり次期女王。何より、僕の婚約者である。

その表情やまるで血塗られたような赤い瞳を見れば、『ギロチン皇女』に相応しくも見える。

……その仮面の下にある彼女の素顔は、まるで違うのだから。

「お待たせしてしまい、申し訳ありません」

胸に手を当て、僕は恭しく一礼する。

「いえ。それより、どうぞこちらへ」

アビゲイルは彼女の侍女であるクレアⅡコルベットを伴い、僕を席へと案内する。

本当ならエスコートすべきなのだろうが、皇国に来てからのこの一年で、彼女はあまりそのようなことは好まないらしいことを知った。もちろん、公式の場ではそうしなければならないわけだが。

「……ですが、本当にこのようなことに効果があるのでしょいか」

「もちろんです。こうして王宮の目立つ場所で定期的に逢っているのを見せることで、周囲に私達が親密であると知らしめられますので」

「はあ……」

アビゲイル曰く、次期女王としての地位を盤石なものにするために、まずは陣営が一枚岩であることを内外に示していく必要があるとのこと。

その第一歩として、あえて敵国ヴァルロワ王国の王子である僕すらも受け入れる度量を見せつける、そんな思惑があるとのことなのだが……。

「……ギユスターヴ殿下、何かご不満でも？」

「いえ、滅相もない」

アビゲイルにじろり、と視線を向けられ、僕は首を左右に振った。

彼女の言うことは一理あるし、ましてやこれで僕にとってマイナスなことではない。

だとすれば、断る理由だつてないのだ。

「こうしてアビゲイル殿下のご好意を独占なさつていて、不満などあるはずがありません。そうですよね、ギュスターヴ殿下？」

ここぞとばかりに念押ししてくるのは、傍に控えていたクレア。

彼女はグレンの妹でもある。

クレアとグレンは第二王妃バトリシアに絶対の忠誠を誓うよう、幼い頃から教育を施されていた。それゆえに元々はアビゲイルの侍女でありながら、第二皇女であるブリジットと内通していたのだが、『王選』を経て呪縛から解き放たれた。

その結果グレン共々こちらの陣営に正式に加わった彼女だが、何故か僕への当たりが相変わらずきつい。

きっと僕とクレアの相性は最悪なのだろう。

「そういうことです、こゝでは、当たり障りのない会話を楽しむことといたしましょう。その……お互い、婚約者として」

「そうですね……」

そうして僕は、今日もまたアビゲイルと他愛のない会話が一時間は続くのかと、そんなことを考えていた矢先。

「失礼します。国王陛下がお二人をお呼びです」
唐突にやってきた侍従が一礼してそう告げた。
僕達の時間を遮るかのように。



「来てもらったのは他でもない。休戦協定が結ばれて一年が経ち、ヴァルロワ王国より親善のための使節団をこちらに派遣したいとの申し出があった」

謁見の間にて王の席に深々と腰かけるエドワード王が、跪くアビゲイルと僕に告げた。

それを聞き、どうしてアビゲイルだけでなく僕まで呼ばれたのか理解できたが、一方でこのことに戸惑っている自分がある。

何せ死に戻る前の人生において、ヴァルロワ王国が皇国へ使節団を派遣したことなど、一度たりともないのだから。

「かしこまりました。つまり陛下は、私達に使節団の饗応をお任せくださる、そういうことでよろしいですね？」

「話が早くて助かる。これは両国の平和をより推し進めるためにも、極めて重要な機会。余の後継

者として饗応役を見事務めてみせよ」

「はい」

エドワード王の言葉に、アビゲイルは深々と首を垂れる。

次期女王になることが決まって一年、彼女はエドワード王との関係構築に腐心してきた。

あの『王選』の場で、エドワード王がアビゲイルではなくブリジットを支持しており、アビゲイルを疎んでいると露呈した。

これを踏まえれば、今のアビゲイルの地位が簡単に瓦解してしまうことは明らかだ。

そうならないためにも、僕達は付け入る隙をほんの少しでも与えてはならない。

もしエドワード王がアビゲイルの落ち度を見つければ、アビゲイルを今の地位から引き下ろすための口実にするだろう。

そうなればこの男のことだ、今は幽閉されているブリジットを、再び担ぎ出してくることもあり得る。

「それで、王国使節団の参加者はどのようになっておりますでしょうか？」

「うむ……デーヴィッド」

「はい」

傍に控えていたデーヴィッドがエドワード王に促され、一步前に出る。

「王国使節団はルイ第二王子を団長とし、護衛としてフィリップ第三王子が率いる王国騎士団、そして……聖女セシルⅡエルヴィシウスが調停役として同行することです」

「っ!？」

セシルが来る。

僕の仇である、あの女が。

「ギユスターヴにとっては久方ぶりの家族との対面だ。使節団が滞在している間、存分に羽を伸ばすがいい」

「……ご配慮いただき、ありがとうございます」

僕は顔を伏せたまま、感謝の言葉を告げる。

あの連中との再会など苦痛でしかないが、王国にとって僕が『皇都襲撃計画』に必要な駒であることには変わりない。

引き続き油断させ、復讐の時のために体裁だけは繕っておかないとな。

「話は以上だ」

エドワード王は立ち上がり、謁見の間を出ていく……のだが。

「……………」

デーヴィッドはその寸前、視線で僕に合図を送ってきた。

「ギュスターヴ殿下」

「どうやら話があるようですね」

アビゲイルも彼の合図に気づいたようで、傍に来て声をかけてきた。
さて……どのような話があるのか。

閉められた扉を見つめ、僕は軽く息を吐いた。



「お忙しい中、貴重なお時間をいただき、ありがとうございます」

その日の夜、皇宮内にあるサロンで待ち構えていたデーヴィッドが胸に手を当て一礼する。

デーヴィッドハミルトン……いや、本当の名前はダビドアプグリフィズだったな。

エドワード王によって滅ぼされた、グリフィズ王国の最後の王族。彼は今、国を滅ぼされた復讐のために、エドワード王に侍従長として近づいている。

「それで、僕にどんな話が？」

「はい。……その前に、ギュスターヴ殿下はあの男の容体について、どのように思われましたか？」

「エドワード陛下の？ 特にいつもと変わらないと感じたが」

「そうですね。表面上はそのようにお思いになったでしょうが、実際のところは違います。あの男は既に食事をすることもままならず、張りのある、彫刻ちやうくのような身体は見る影もなくなっておりま
す。軽く見積もって、あの男の命はあと一年というところでしょう」

……デーヴィッドのその見立ては正しい。

実際、死に戻る前の人生において、エドワード王の死期まではあと一年後。

それにより、皇国はアビゲイルとブリジットによる後継者争いで生じる混乱うずの渦に巻き込まれることになるのだから。

「それで？ エドワード陛下の死期が近いと知って、デーヴィッド殿どのはどうするつもりなのかな？」

「もちろん、当初の計画どおりに動くだけです」

デーヴィッドの計画——それは、グリフィズ王国の再興さいきう。

それはエドワード王への復讐とともに、彼が今もなお生き続ける糧かてとなっている。

「そんなことは分かっている。そうではなく、この僕に何をしてほしいのかと聞いているんだ」

「はは、そういうことでしたか」

僕が少し呆れ気味に告げると、デーヴィッドはおどけた。

彼は僕の反応を楽しんでいるようだが、こちらとしては早く本題に入ってほしいところだ。

「いずれあの男は、ベッドから起き上がることもまままらなくなる。だからそうなる前に、あらか

じめ段取りを決めておきたいのですよ。……特に、アビゲイル殿下にはなんとしてでもグリフィズ王国の独立を認めていただかなければ」

デーヴィッドの雰囲気が一変し、僕に鋭い視線が突き刺さる。

先の『王選』では彼の協力があったからこそ、アビゲイルは勝利することができた。

その見返りとして彼女が女王となったあかつきには、グリフィズ王国の再興を支援すると約束したのだ。

「言っておきますが、今さらなかったことには……」

「当然だ。このことはとくにアビゲイル殿下にもお伝えし、了承を得ている」

「それを聞いて安心しました」

デーヴィッドは芝居がかった仕草で、深々と頭を下げる。

だが、僕との約束をあえて念押しするためだけに、こうして呼び出したわけではないだろう。

「もういいだろう。本題に入ってくれ」

「……やはりギユスターヴ殿下は、少々やりにくいですね。もう少し愚鈍でいただけたなら、私も色々とやりやすかったのですが」

「御託はいい」

「そうでした」

くつくつと笑うデーヴィッド。手を取り合っている僕達だが、それはあくまでも互いに目的を達成するためにすぎず、油断はできない。

少しでも気を許せば、こちらが追い込まれることになりかねないのだから。

「大したことではないんです。あの男の容体が思ったより悪いので、少々時期を早めようと思いついて。それで、皇国の軍部を掌握しているアビゲイル殿下が何もしないよう取り計らっていただきたいな、と」

少々時期を早める——つまり、弱っているエドワード王の首をもう獲ってしまおうということか。皇国の誇る武人二人がアビゲイルの陣営にいるのだから、確かにデーヴィッドの言うとおり、アビゲイルが何もしないだけで勝利は約束されたも同然に見える。

だが。

「待つんだ。あまりエドワード陛下を舐めないほうがいい」

「何故？ 今の状態でも戦場に立つことは不可能。なら……」

「甘い」

デーヴィッドの言葉を遮り、僕は冷たく言い放った。

病に臥せているからといって、あの『金獅子王』エドワードⅡオブ・ストラスカライドが、グリフィズ王国の蜂起を指を咥えて見逃す？ 馬鹿な。

腐っても、あの男は英雄なのだ。

それこそ、歴史上の歴々と比肩するほどの。

「悪いことは言わない。残りたった一年我慢するだけで、デーヴィッド殿の悲願は達成されるんだ。ここで焦る必要はないだろう」

「いえ、あります。ただ死ぬのを見届けるだけでは、この私は満足できないのですよ」

そう言うと、デーヴィッドは憎悪に満ちた目で僕を睨んだ。

どうやら僕が思っている以上に、エドワード王への憎しみが強いようだな。

「……とにかく、デーヴィッド殿の頼みは分かった。だが、何度でも忠告させてもらう。あの男を……エドワード王を舐めてはいけない」

僕は思いつめた表情のデーヴィッドを残し、サロンを出た。

◇

「そうですか。デーヴィッドが……」

僕は皇宮の離れにある隠し部屋で、デーヴィッドとのやり取りについて報告すると、アビゲイルは口元に指を当て思案する。

アビゲイルにとっては皇国の統治にも影響する重大な話。はいそうですか、というわけにはいかないのだろう。

とはいえ。

「アビゲイル殿下。分かっていると思いますが、彼には『王選』での借りがあります。あまり無下にすることはできません」

「ええ、分かっています。危惧しているのは、果たしてそう上手くいくのかということです」

「アビゲイル殿下の言うとおりで。国王陛下が、そのようなことを見過ごすはずがない」

眉間にしわを寄せ、グレンがかぶりを振る。

彼を含め、今この部屋にいる面々にはデーヴィッドの素性について既に話しているが、ただ一つだけ伝えていないことがある。

それは、デーヴィッドの毒により、エドワード王の命があと一年しか残されていないということ。知っているのは、この僕と部屋の端で無言で話を聞いているマリエットだけ。

「それでも、デーヴィッド殿には勝算があるようです。それがどのようなもののかは、残念ながら僕にも明かしてはくれませんでした」

そうやって僕はかぶりを振る。

考えられるのは、グリフィズ王国だけでなくかつての小国群と同時に蜂起することだろうか。

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、
隣国のギロチン皇女と復讐を誓う 2

問題は、かつての小国がデーヴィッドに賛同して再び剣を取るのかということ。

小国群が皇国に併合され、既に二十年以上が経っている。今さらそれを望むとも思え……って。

「サイラス將軍、どうされたのですか？」

「……いや、なんでもありませんわい」

サイラス將軍はそう言つて顔を背けるが、あからさまに嘘だと分かる。

その証拠に、デーヴィッドの話をしてからというもの、その表情は険しく拳を握りしめたままだ。それこそ、今にも暴れ出してしまうのではないかと思うほどに。

「ふう……いづれにせよ、デーヴィッドが蜂起するのはまだ先でしょう。頭の痛い話ではありませんが、まずは先に考えなければならぬことがあります」

「ヴァルロワ王国の使節団、ですね」

僕がそう告げると、アビゲイルがゆつくりと頷く。

王国の使節団派遣は死に戻る前の人生ではなかったために、どのようなことが起こるのか予想がつかない。

ただ、ルイやフィリップに加え、あのセシルまでが同行するのだから、何も起こらないということだけはあり得ないだろう。

何せセシルを含め、『皇都襲撃計画』に関与している者全てが今回の使節団の一員なのだから。

「ギウス、お前は王子だったんだ。連中の目的など、分かることはないのか？」

「それが分かったら苦労しない。大体、王国での僕の立場は以前から何度も話しているだろう」

「……そうだったな」

肩を竦める僕を見て、ばつが悪くなったのかグレンは視線を逸らしてしまった。

僕にとつてあの連中は復讐の対象でしかないため、別に気にするような話ではないんだが……。

「はっは！ まさかあのグレンが他人を氣遣うとはもう！」

「……………うるさい」

ようやくいつもの調子に戻ったサイラス將軍が、グレンの背中を思いきり叩く。グレンはただでさえ仏頂面だというのに、ますます気難しい表情になった。

「ここで悩んでいても始まりません……と言いたところですが、王国の目的が皇国打倒である以上、最大限警戒しなければなりません。そのためにも」

そう言うと、アビゲイルがゆつくりと僕に近づく。

「ギュスターヴ殿下、あなたが頼ります。使節団が訪れた際は、私を補佐してください」

「もちろんです。連中の目論見を打ち砕くこそが、僕の存在意義なのですから」

真紅の瞳で見つめるアビゲイルに、僕は力強く頷いてみせた。

そう……僕が二度目の生を送っているのは、全てヴァルロワ王国に……裏切った聖女セシルに復

嘗するため。

それが叶うのならば、僕はこの命を投げうってでも果たしてみせる……って。

「あの……どうかなさいましたか？」

「……いいえ」

おずおずと尋ねるが、アビゲイルはかぶりを振って踵^{きびす}を返し、僕から離れていく。だが、彼女がほんの僅^{わず}かだけ見せた、どこか悲しげな表情が脳裏^{のうり}に焼き付いた。

◇

「ふむ……美味^{うま}い」

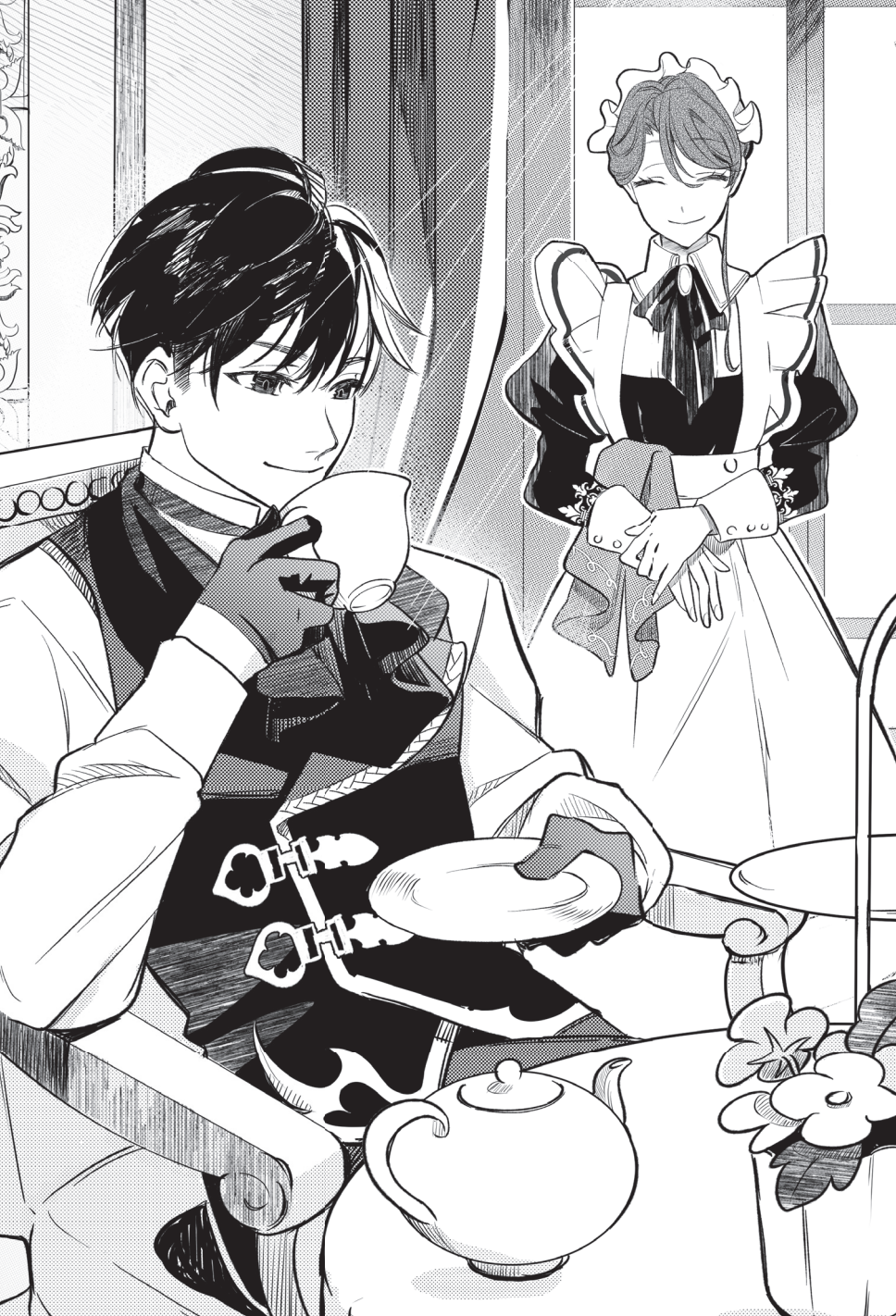
マリエットが淹れてくれたお茶を口に含み、僕はほう、と息を吐いて呟いた。

「それは何よりです」

僕の様子を見て満足したのか、マリエットが嬉しそうに微笑む。

彼女を最初に仲間に引き入れてかれこれ四年近くになるが、完全に僕の舌の好みを分かれてしまっているな。

今では彼女以外の侍女など、考えられないほどに。



「ところでマリエツト、セシルからは？」

「……いいえ。今のところ、使節団の派遣についての連絡はありません」

「そうか……」

落ち込んだ様子で答えるマリエツト。

僕は窓の外に見える皓々と輝く月を眺めた。

使節団派遣に当たり、王国との調整役であるマリエツトと連絡を取らないなんてことは考えにくい。

ならば、可能性として考えられるのは、マリエツトが既に裏切っていることを感づかれたか、あるいはマリエツトが僕を裏切ったか。

「……そういえば、君の家族はどうしている？」

「今はカミーユ……弟の静養のため、一家全員で港町カレルに移り住んでいます。元々、ジル―家の領地も大したことはありませんので、領主がいなくなっても問題にはなりません」

「そうか。君の弟が少しでもよくなるといいが……」

探りを入れるため、家族の話を振ってみたわけだが、特にマリエツトの言動に変化は見られない。しかし、それでも安心するのは危険だ。

彼女が僕を裏切ったわけではないと思いたいものの、疑ってかかったほうがいいだろう。

これまでどれだけ、彼女と信頼を築いてきたとしても。

「ギュルターヴ殿下、折り入ってお願いしたいことがございます」

「？ 僕にお願い？」

突然マリエツトはかしこまり、深々と頭を下げる。

さて……彼女のお願いとは一体何だろうか。家族についてであることは間違いないだろうが……。

「どうか私の家族を、皇国で受け入れていただくことはできませんでしょうか……」

「君の家族を？」

マリエツトのお願いは意外なものだった。

彼女の家族を皇国で受け入れる。

それはつまり、ヴァルロワ王国を捨てるということ。

「……そんなことをすればジル―家は全てを失うことになる。それだけじゃない。王国の間者である君への人質として、家族は王国に監視されているはずだ。下手をすれば……」

「もちろんそれは理解しております。ですが、このまま家族を王国に残していても……早いか遅いかの違いはありません。いずれ同じ目に遭うだろうことは想像に難くないです」

「……………」

彼女の言うことにも一理ある。

あの連中のことだ。皇都襲撃が成功すれば、用済みとしてマリエットとその家族を消すくらい、平気でやっつけるだろう。

……いや、死に戻る前の人生でも、きっとそうなっていたに違いない。

だが、彼女の家族を皇国に迎え入れれば、マリエットが王国を裏切ったと露見してしまう。

復讐を果たすためには、彼女に王国の間者であり続けてもらわなければ困るのだ。

なのに。

「……このことは、すぐにアビゲイル殿下に相談する。君の家族の受け入れ先、それに弟の治療に必要なものの確保を含めて」

「！ あ、ありがとうございます！」

一体僕は何を考えている。そんなことをすれば、せつかくの復讐が台無しになりかねないんだぞ。でも……それでも。

「よかった……よかった……っ」

床に平伏し、喜びに震えるマリエット。

……ああ、そうだな。もしここで彼女の願いを断れば、それこそ僕を裏切って復讐計画の全てが露呈しかねない。

だからこうすることが最善だった。

ただ、それだけだ。

ならば彼女の願いを無下に、簡単に切り捨てるわけにはいかない。それと。

「君の不興を買って、この美味いお茶を口にできなくなるのは困るからな」

「あ……ふふ、本当にギユスターヴ殿下は……っ」

少しおどけてそう告げると、合わせるように笑みを零すマリエット。

ただしその瞳からは、歓喜の涙も溢れていた。



「……ギユスターヴ殿下は、マリエットに少々甘いのでは？」

次の日、早速僕はマリエットの件についてアビゲイルに相談したのだが、何故か胡乱な目を向けられている。

マリエットの重要性や断った場合の危険など、十分に説明したつもりなのだが……。

「ふう……分かりました。すぐに手配して、彼女の家族を王都へ連れてくることにしましょう。もちろん、住居の確保やその他諸々を含め手配しておきます」

「ありがとうございます。これでマリエットも、ますますアビゲイル殿下に感謝することでしょう」

「……私ではなく、きつとあなた様に感謝するのでしょうか」

深々と頭を下げて謝意を示したのに、アビゲイルからは皮肉を返されてしまった。

とはいえ、確かにマリエットの主人は僕ではあるものの、実際に面倒を見るのはアビゲイル。さすがにマリエットも、そのことは理解すると思うのだが。

「ですがギュスターヴ殿下も危惧されているとおり、そうすると王国に私達の思惑が露呈してしまうことになります。例の『皇都襲撃計画』は実行されないか、または別の手を打つてくることになるでしょう」

「……………」

「その場合、ギュスターヴ殿下が計画を立てていた王国を迎え撃つという策は、使えなくなってしまう」

「分かっています……」

アビゲイルに指摘されたとおり、これからは死に戻る前とは違うことが起きる。つまり、連中の裏をかける。

……何よりも復讐を最優先にすると決めておきながら、たかがマリエット一人のために計画を台

無しにするなんて、本当に馬鹿げているな。

「……とはいえ、私も正式に次期女王の座をつかみ、『王国の盾』と『王国の矛』もいます。いざとなれば、王国を迎え撃つことも不可能ではない氣もしますが」

せっかく氣を遣ってアビゲイルがそう言ってくれているが、皇国内におけるアビゲイルの地位はまだ盤石ではない。

これはひとえに、エドワード王がいまだにアビゲイルに『ギロチン皇女』という役目を押し付けているため。

要は皇国の人々にとって、彼女は今も畏怖と憎悪の象徴なのだ。

「だから、あまりそのような顔をなさらないでください。というより、そろそろ私のことを信用していただけでもよろしいのでは？」

氣づけば僕の手をとり、アビゲイルは無表情でそう告げる。

どうやら慰めてくれているつもりのようなのだが、相変わらず不器用だな。

「ええ、信用しておりますよ。僕とあなたは、運命共同体。どのようになろうとも、僕達は同じ結末を迎えるのですから」

そう……王国の『皇都襲撃計画』を阻止できなければ、死に戻る前と同様、僕とアビゲイルは処刑される。

嘲笑^{あざわら}う、ルイとセシルの目の前で。

「なら、これ以上悩んでも仕方ありませんね。そんな無駄なことをするくらいなら、王国使節団への対策を少しでも考えたほうがましです」

「そのとおり、ですね」

澄^すました表情のアビゲイルに、僕は苦笑しつつ頷いた。



「これは本当なのか!？」

「間違いございません」

エドワード王から王国使節団が来訪することを告げられてから二週間後。

マリエットのもとに、セシルから次の指示が記された書状が届いた。

その内容というのが、今から二週間後に使節団が皇都ロンディニアにやってくることで、そして、この僕と協力してテミズ川とは別の皇都への上陸ルートを確認すべしというものだった。

つまり、王国はいよいよ皇都襲撃に向けて動き出したということ。
だが。

「どうして今なんだ……?」

死に戻る前の人生では、皇都襲撃は今から二年後。実際、前回の上陸ルート確保の指示はエドワード王が崩御^{ほうご}した後だ。

そこから考えるに、連中は今なら皇都襲撃が可能だと判断したことになる。

「分かりませんが、アビゲイル殿下が次期女王に選ばれたことが契機になっていることは間違いないかと」

「そう、だな……」

つまりそれだけ、アビゲイルは王国に舐められているということ。

さすがに王国も、エドワード王の容体を正確に把握しているとは思えない。なら、エドワード王が自ら打って出ることになれば、皇都を守備するのはアビゲイルの役目。そうやって皇国の兵力を分断させ、一気に皇都に攻め入る気か。

もしそうだとしたら。

「ちょっと舐めすぎだな」

その場合、エドワード王の傍にはグレンが就くことになると思うが、一方でアビゲイルにも百戦錬磨^{ひゃくせんれんま}のサイラス將軍がいる。

たとえ王国が攻め入ろうとしても、これを突破することは容易^{ようい}ではない。その隙に、エドワード

王の軍と合流すれば、逆に王国は挟撃きょうげきされることになるからな。

「聖女セシルは、皇国に来訪した際にその別ルートしんちやうの確保の進捗しんちやくについて確認すると言っております。いかがいたしますか？」

「決まっている。適当に順調だとも言うっておけば……いや、待てよ」

どうせなら、このことを逆手さかてに取るべきだろう。

連中の皇都襲撃のルートをあらかじめ誘導してやれば、こちらとしてもそれだけ迎撃しやすくなる。

「……プリント島の南岸にある港湾都市こうわんとしブランドン。ここを王国の上陸の拠点として確保した。セシルにはそう報告してくれ」

「ブランドン、ですか……？」

「ああ」

実際、死に戻る前の人生でも、王国はここから上陸した。

そのために僕は、アビゲイルを騙だましてブランドンの指揮権を手に入れ、マリエットに手配させたのだ。

「あそこなら王国軍の上陸に申し分ない広さの港が確保できるし、何より、皇都ロンディニアまで距離も短く関所や村なども少ない。連中も信じやすいだろう」

「なるほど……」

僕の説明に、マリエットが納得の表情で頷く。

死に戻る前の人生においてブランドンを上陸場所に指定したのは、他ならぬマリエット。その時の僕は、それに従っただけだった。

せっかくだから、今回はそれを利用してもらう。

「こうしておけばセシルは君を信用するだろうし、少なくとも君の家族を皇都に招くまではこちらの思惑に感づかれることもない。それまで、引き続き連中を欺いてくれ」

「かしこまりました。必ずや、ギユスターヴ殿下のお役に立つてみせます」

「ああ、期待している」

恭しく一礼し、マリエットは部屋を出る。

「……そのためにももう一手、いや二手用意しておくべきだろうな」

軽く息を吐いた後、僕もまた部屋を後にした。



「ご報告します！ 王国使節団はテミズ川を渡り、もう間もなく皇都に到着いたします！」

跪く伝令兵が、アビゲイルに報告する。

いよいよ王国使節団が訪れる日となり、僕達は連中が来るのを今か今かと待ち構えていた。

グレン率いる皇国騎士団二千騎^き及びサイラス將軍率いる皇国軍一万の、計二万二千の軍勢をもって。

「王国使節団は、これを見てどう思うでしょうか」

「少しは身の程を弁^{わきま}え、自重してくれるといいですが」

居並ぶ兵士達を眺め咄くアビゲイルに、僕は肩を竦め軽口で答える。

見方によつては国を挙げて使節団を盛大に歓迎しているようにも取れるが、一方で、連中は恐怖するだろう。

休戦協定を結んでいるとはいえ、一年前まで百年も続く戦を繰り広げてきた宿敵。ほんの些^さ細なことで、再び血みどろの争いに逆戻りすることもあり得る。

そう……対応を一步でも間違えれば、使節団自らが戦端を開きかねないのだから。

とはいえ、王国の外交官を務めるルイはともかく、無駄に自尊心^{じぞんしん}だけ高く暴力を振るうことしか頭にないフィリップは薄氷^{はくひょう}を踏むような状況などお構いなしに喚^{わめ}き散らすかもしれないな。

しかし、あの女……セシルだけは読めない。

王国の『皇都襲撃計画』に加担し、僕を利用したあの女。

女神リアンノンの名のもとに僕への愛を誓いつつ、本当はルイと恋仲だったあの女。

そもそもあの女は、西方諸国に一大勢力を持つ聖リアンノン教会の聖女なのだ。あえて王国に加担してまで、どうしてストラスクライド皇国打倒に力を貸すのか。

死に戻る前の人生では、そのことを知る機会はなかった。

結局、僕はあの女のことを何も知らないのだ。

「……ははっ」

アビゲイルに気づかれないように俯^{うつむ}きつつ、僕は自嘲^{じちやう}気味に笑う。

なんにせよ僕はセシルに裏切られ、ギロチンの刃が振り下ろされる中で復讐^{ふしう}を誓った。なら、やるべきことは決まっている。

すると。

「っ！ 来ました！」

テミズ川の下流の先から見えた、三本のマスト。

間違いない。あれこそが使節団を乗せた、王国の船だ。



「その……これほどの歓待を受けるとは思ってもおりませんでした。このルイ＝デュ＝ヴァルロワ、

心より感謝いたします」

一万二千の軍勢を前に顔を引きつらせつつも、ルイは胸に手を当てて深々とお辞儀をした。後ろに控える使節団の他の面々も同様に、さすがにこの異様な出迎えに慄いているようだ。一方で。

「フン」

「うふふ……」

興味なさそうに鼻を鳴らすフィリップと、口元を押さえ微笑を浮かべるセシル。この二人の目には一万二千の軍勢も映っていないらしい。

「改めまして、第一皇女のアビゲイルです。この度は使節団の皆様のお世話を仰せつかっております」

フィリップを除く面子には僕の婚約の際に会っていて面識があるアビゲイルは、スカートをつまみ表情を崩すことなく淡々と挨拶をする。

ただ、彼女の真紅の瞳は色とは真逆に、どこまでも冷たさを湛えていた。

「国王陛下が皇宮でお待ちです。皆様、どうぞこちらへ」

アビゲイルは使節団を連れ、用意してあった豪華な馬車に乗せる。僕も婚約者として、アビゲイルとともに馬車へと乗り込もうとするのだが。

「何故この俺が、この男と同じ馬車に乗らねばならん」

椅子の上で腕組みをしてふんぞり返るフィリップが、こちらを睨みながら告げた。

どうやらこの男、使節団が皇国との親善のために来たのだということを忘れてしまっているらしい。

「……どなたかは存じませんが、私の夫となる御方に何かご不満でも？」

今まで聞いたことがないような低い声で尋ねるアビゲイル。『ギロチン皇女』の面目躍如とでもいうかのような威圧に、庇われているはずの僕のほうが変な声を漏らしそうになる。

「と、とんでもありません！ 弟との久しぶりの再会に、騎士団長であるフィリップも照れているのです！ そうだよな？ な！」

「……そのとおりです。変に誤解を生むような態度を取ってしまい、申し訳ありません」

王国の外交官として、使節団の団長として、絶対に失敗するわけにはいかないルイは、慌てて取り繕いフィリップに同意を促す。

当のフィリップも、さすがにこのままでは帰国後に父であるシャルル王から叱責を受けることを危惧したようで、素直に頷くとともに謝罪した。

「そうですか。ここは王国ではありませんので、これからはお気を付けください。……何せ皇国には、将来の夫のためならば国王陛下の命に背いてでも手を出しかねない者もおりますので」

とどめとばかりにアビゲイルが釘を刺し、僕達を乗せた馬車は皇宮の門をくぐった。それにしても……僕のためにそんなことをする馬鹿は、さすがにいないと思うが……。



「王国使節団よ、よくぞまいられた」

玉座に腰かけ、目の前で跪くルイ達使節団の面々に労いの言葉をかけるエドワード王。威厳もさることながら、肌艶も、声の張りも、『金獅子王』がいまだ健在であることを知らしめるには十分だった。

なるほど。少なくとも見た目については、化粧で上手く誤魔化したようだ。

「お目にかかり、恐悦至極です。親善の証といたしまして、王国産の寶石などを献上いたします」
「それはありがたい……が、欲しいものは余自ら手に入れる性分ゆえ、気持ちだけもらっておくでしょう」

ルイの奏上に、エドワード王は顎髭をさすりながら答える。

まあ、本音は『寶石よりも王国を寄越せ』といったところだろうか。

「なるほど……エドワード陛下は殊の外無欲なのですね」

「ははははは！ 面白いことを言う！ 余ほど強欲な者はこの国におらぬわ！」

聖女が微笑みつつも心にもないことを告げるが、それがツボに入ったのかエドワード王は膝を叩きながら豪快に笑った。

その目は一切笑っていないが。

「使節団の者達よ、今宵はお主らを歓迎する宴も用意している。皇国に滞在中は存分に楽しまれよ。アビゲイル、ギユスターヴ、しっかり世話をするのだぞ」

「はい」

「承知いたしました」

「うむ」

エドワード王は満足げに頷き立ち上がると、デーヴィッドをはじめとした侍従の面々を引き連れて謁見の間から出ていこうとして。

「おっと」

エドワード王は、軽くよろめいた。

「いやはや、年は取りたくないものだな」

そう言って苦笑して頭を掻いてから、エドワード王は、今度こそ退室した。

「それでは、皆様をお部屋へご案内いたします」

アビゲイルは立ち上がり、使節団の面々を引き連れて部屋の外に出る。

もちろん僕もその後に続くのだが、視界の端には、ほんの僅かに口の端を吊り上げたセシルが映る。

（ひょっとして、気づかれたか？）

王国が休戦協定に従って皇国を襲^{おそ}わないのは、ひとえにエドワード王がいるからこそ。もし体調が万全ではないことが知れば、すぐに協定が破棄されるおそれがある。

皇国内のアビゲイルの体制と支持が万全でない中、そのような事態は避けねばならない。

「……なるほど。国王陛下も意地が悪い」

僕は含みのある笑みを浮かべ、あえて聞こえるように呟いた。

こうすれば、先程のエドワード王の姿は使節団を油断させるために見せたものだ、と、使節団の連中を勘違いさせることができるだろうと考えて。

特に立場上最も慎重^{しんちょう}にならざるを得ないルイは、仮にセシルが進言をしても頭から信じることは難しくなる……といいのだが。

とにかく、アビゲイルの地盤が盤石となるまでは、まだエドワード王には王国が畏怖する『金獅子王』のままでいてもらわねば困る。

「ギユスターヴ、今のは……？」

「すみません、ただの独り言です」

やはり気になったらしく、案^{あん}の定^{じょう}ルイがおずおずと尋ねる。もちろん僕は、それに答えるつもりなどさらさらないが。

「うふふ……ギユスターヴ殿下、王国にいらつした頃とはお変わりになりましたね」

「っ!？」

セシルがいきなり振り返るなり、吐息がかかるほど至近距離まで顔を寄せてきた。

僕は驚きのあまり、思わず息を呑んでしまった。

「そ、そうでしょうか。僕自身は、特に変わったつもりはないのですが」

「ええ、それはもう。大変見違えました。アビゲイル殿下の婚約者となってしまうれたことを、心から後悔^{こうかい}するほどに」

セシルの奴、ひょっとして僕が今なお貴様に懸^{けぞう}想しているかどうか、確かめているつもりか？

「そうですね。アビゲイル殿下が次の女王になられることが決まった今、僕も王配になる者として変わらなといけませんから。……それに色々なものを断ち切るためにも」

僕はわざと愁^{うれ}いを帯^おびた表情を作り、僅かに顔を逸らして告げる。

こう言っておけば、セシルも僕がまだ未練があると受け止めるだろう。

マリエットの家族を皇国に迎え入れるまでとはいえ、それでも、まだ感づかれるわけにはいかな

いからな……って。

「あ、あの……」

「無理をなさる必要はありません。王国は今も、ギュスターヴ殿下の故郷。そしてこの私は今も、いいえこれからも、殿下のことをお慕い続けております」

いきなり手を取り潤んだ瞳で見つめるセシルに、僕は顔をしかめそうになる。

誰も僕達のやり取りに気づいていないとはいえ、不用意にも程がある。

「……皇国の者達に勘違いされています。お戯れはこの辺で」

「そうですね……ですが、決して冗談などではありませんよ」

セシルは僕の手をゆつくりと離すと、顔を伏せ、足早にルイの隣に並んだ。

ご苦労なことだ。死に戻る前ならともかく、既に裏切られた僕には、貴様の一挙手一投足に嫌悪感しか抱かないんだよ。



「マリエット、おかしいところはないか？」

鏡の前で自分の姿を確認しながら、僕はマリエットに尋ねる。

これから王国使節団を歓迎するパーティーが催されるのだが、アビゲイルの婚約者であり王国の元第六王子である僕は否応なしに強制参加だった。

できればお断りしたいが、そういうわけにはいかない。

「とてもよくお似合いです。王国使節団の皆様もギュスターヴ殿下に一目置かれるでしょう」

「冗談はよしてくれ。あの連中が僕に対してそんなことを思うわけがないだろう」

あいつらにとつて僕は、どこまでも侮蔑の対象であり馬鹿な駒でしかない。こちらとしても、今さら見直されても迷惑なだけだ。

「それよりマリエット、君もとてもよく似合っているぞ」

「あ……その、ありがとうございます……」

今日のパーティーにはマリエットも侍女として参加することになっている。

彼女が僕と同じく王国出身の貴族令嬢であること、それに、王国の連絡係として報告をしなければならぬという職務上の理由からではあるが。

「パーティーが始まったら、僕の傍からすぐに離れてくれて構わないぞ。連中への報告もあるだろうし、君自身も家族ともども皇国に骨を埋めるんだ。将来の相手を探すためにも……」

「いいえ。私は生涯ギュスターヴ殿下にお仕えいたしますので」

「そ、そうか……」